

EMaT

工学系数学統一試験

Engineering Mathematics Test

2025年12月13日（土）

4分野受験 午後1時30分～午後4時10分

3分野受験 午後1時30分～午後3時30分

2分野受験 午後1時30分～午後2時50分

1分野受験 午後1時30分～午後2時10分

* 受験分野は、各大学・高専の指示に従ってください。

受験上の注意

- 机の右上に学生証を提示すること。
- 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
- 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁、解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- マークには **HB または B の鉛筆**（またはシャープペンシル）を使用すること。
- 解答用紙を汚損したときは、手を挙げて監督者に知らせること。
- 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
- 試験開始 40 分後から退室を認める。
- 問題冊子は持ち帰ること。
- 気分が悪くなった場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- その他、監督者の指示に従うこと。

解答上の注意

- (1) 解答として最も適切なものを指定された解答群から選び、その記号を解答用紙にマークすること。ただし、解答群の中にふさわしいものが見つからない場合には i をマークすること。例えば、**23**と表示してある問い合わせに対して解答記号 (c) を選ぶ場合は、次のようにマークすること。

23	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱
----	-------------------------------------

- (2) 破線で囲まれた番号は、前に現れた番号であることを表す。したがって、例えば **23** には **23** と同じ解答が入る。
- (3) 解答が数式の場合、**23** は (**23**) という意味である。したがって、例えば **23** の解答が $-x - 1$ の場合、 $x^2 - \boxed{23}$ は $x^2 - (-x - 1)$ を意味する。
- (4) \mathbb{R} は実数全体の集合とする。
- (5) $\log x$ は x の自然対数、すなわち e を底とする対数 $\log_e x$ を表す。
- (6) $\sin^{-1} x, \cos^{-1} x, \tan^{-1} x$ は、それぞれ $\sin x, \cos x, \tan x$ の逆関数を表し、 $\arcsin x, \arccos x, \arctan x$ と書き表されることもある。各逆関数がとる値の範囲（値域）は、 $-\frac{\pi}{2} \leq \sin^{-1} x \leq \frac{\pi}{2}, 0 \leq \cos^{-1} x \leq \pi, -\frac{\pi}{2} < \tan^{-1} x < \frac{\pi}{2}$ とする。

目次

第1分野	微分積分	3
第2分野	線形代数	11
第3分野	常微分方程式	21
第4分野	確率・統計	31

第1分野 微分積分

[問 1 ~ 問 4 : 解答番号 1 ~ 17]

問 1 (1) 次の 3 つの極限値を求めよ.

$$\lim_{x \rightarrow 0} \frac{\log(x+1)}{x} = \boxed{1}$$

$$\lim_{x \rightarrow 0} \frac{\log(x+1) - x}{x^2} = \boxed{2}$$

$$\lim_{x \rightarrow 0} \frac{\log(x+1) - x + \frac{1}{2}x^2}{x^3} = \boxed{3}$$

1 ~ 3 の解答群

- | | | | | |
|------------------|------------------|------------------|------------------|-----|
| Ⓐ 0 | Ⓑ 1 | Ⓒ 2 | Ⓓ 3 | Ⓔ e |
| Ⓕ $\frac{1}{2}$ | Ⓖ $\frac{1}{3}$ | Ⓗ $\frac{1}{6}$ | Ⓘ $\frac{1}{e}$ | |
| Ⓛ -1 | Ⓜ -2 | Ⓝ -3 | Ⓞ -e | |
| Ⓛ $-\frac{1}{2}$ | Ⓜ $-\frac{1}{3}$ | Ⓝ $-\frac{1}{6}$ | Ⓞ $-\frac{1}{e}$ | |

(2) n を自然数とする. 定数 a_k ($k = 1, 2, 3, \dots, n$) に対して

$$\lim_{x \rightarrow 0} \frac{\log(x+1) - a_1x - a_2x^2 - \dots - a_{n-1}x^{n-1} - a_nx^n}{x^{n+1}}$$

が (有限な) 極限値をもつのは $a_k = \boxed{4}$ ($k = 1, 2, 3, \dots, n$) のときである.

4 の解答群

① k

② $\frac{1}{k}$

③ $k!$

④ $\frac{1}{k!}$

⑤ $(-1)^k k$

⑥ $\frac{(-1)^k}{k}$

⑦ $(-1)^k k!$

⑧ $\frac{(-1)^k}{k!}$

⑨ $(-1)^{k-1} k$

⑩ $\frac{(-1)^{k-1}}{k}$

⑪ $(-1)^{k-1} k!$

⑫ $\frac{(-1)^{k-1}}{k!}$

問 2 広義積分

$$\int_0^1 \sqrt{\frac{x}{1-x}} dx = \lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \int_0^{1-\varepsilon} \sqrt{\frac{x}{1-x}} dx$$

を考える。

まず、半角の公式より、 $2 \cos^2 \theta = \boxed{5}$ であるから

$$(*) \quad \int 2 \cos^2 \theta d\theta = \boxed{6} + C \quad (C \text{ は積分定数})$$

である。

次に、 $\sqrt{1-x} = \sin \theta$ $\left(0 \leqq \theta \leqq \frac{\pi}{2}\right)$ とおくと、 $\frac{dx}{d\theta} = \boxed{7}$ であり、 x と θ の対応は以下のようになる。

x	$0 \rightarrow 1 - \varepsilon$
θ	$\frac{\pi}{2} \rightarrow \boxed{8}$

よって、 $(*)$ を用いると

$$\lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \int_0^{1-\varepsilon} \sqrt{\frac{x}{1-x}} dx = \lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \int_{\frac{\pi}{2}}^{\boxed{8}} \frac{|\cos \theta|}{\sin \theta} \boxed{7} d\theta = \boxed{9}$$

となる。

5 ~ 7 の解答群

- ① $1 + \cos 2\theta$ ② $1 - \cos 2\theta$ ③ $1 + \sin 2\theta$
④ $1 - 2 \cos^2 \theta$ ⑤ $\theta + 2 \cos 2\theta$
⑥ $\theta + 2 \sin 2\theta$ ⑦ $\theta + \frac{1}{2} \cos 2\theta$ ⑧ $\theta + \frac{1}{2} \sin 2\theta$
⑨ $\cos 2\theta - 1$ ⑩ $\sin 2\theta - 1$ ⑪ $2 \cos^2 \theta - 1$
⑫ $2 \cos \theta \sin \theta$ ⑬ $-2 \cos \theta \sin \theta$

8 • 9 の解答群

- ① $\sin^{-1} \varepsilon$ ② $\sin^{-1} \sqrt{\varepsilon}$ ③ $\sin^{-1} (1 - \varepsilon)$
④ $\frac{1}{\sin \varepsilon}$ ⑤ $\frac{1}{\sin \sqrt{\varepsilon}}$
⑥ $\frac{1}{\sin(1 - \varepsilon)}$ ⑦ $\frac{1}{\sin \sqrt{1 - \varepsilon}}$ ⑧ 0
⑨ 1 ⑩ π ⑪ 2π
⑫ $\frac{\pi}{2}$ ⑬ $\frac{\pi}{4}$

計算用紙

問 4 重積分 $\iint_D \frac{1}{(1+x^2)^3} dx dy$ の値を求める. ここで D は xy 平面内の集合

$$D = \{(x, y) \mid 0 \leq y \leq 1, y \leq x \leq 1\}$$

である. 積分順序を交換すると

$$\begin{aligned} \iint_D \frac{1}{(1+x^2)^3} dx dy &= \int_0^1 \left(\int_y^1 \frac{1}{(1+x^2)^3} dx \right) dy \\ &= \int_0^1 \left(\int_{\boxed{14}}^{\boxed{15}} \frac{1}{(1+x^2)^3} dy \right) dx \end{aligned}$$

である. よって

$$\iint_D \frac{1}{(1+x^2)^3} dx dy = \int_0^1 \boxed{16} dx = \boxed{17}$$

である.

14 • 15 の解答群

- ① 0 ② 1 ③ 2 ④ x ⑤ y ⑥ $1-x$ ⑦ $1-y$

16 の解答群

- ① $\frac{1}{(1+x^2)^2}$ ② $\frac{x}{(1+x^2)^2}$ ③ $\frac{1-x}{(1+x^2)^2}$ ④ $\frac{y}{(1+x^2)^2}$
 ⑤ $\frac{1-y}{(1+x^2)^2}$ ⑥ $\frac{1}{(1+x^2)^3}$ ⑦ $\frac{x}{(1+x^2)^3}$ ⑧ $\frac{1-x}{(1+x^2)^3}$
 ⑨ $\frac{y}{(1+x^2)^3}$

17 の解答群

- ① 0 ② $\frac{1}{2}$ ③ $\frac{3}{4}$ ④ $\frac{3}{8}$ ⑤ $\frac{3}{16}$
 ⑥ -1 ⑦ $-\frac{1}{2}$ ⑧ $-\frac{3}{4}$ ⑨ $-\frac{3}{8}$ ⑩ $-\frac{3}{16}$
 ⑪ y ⑫ $\frac{y}{2}$ ⑬ $\frac{3y}{4}$ ⑭ $\frac{3y}{8}$ ⑮ $\frac{3y}{16}$

計算用紙

第2分野 線形代数

[問1～問5：解答番号 **18** ∼ **35**]

(注意) 行列 A に対し, $\text{rank } A$ は A の階数 (ランク) を表す.

問1 (1) 行列 A を

$$A = \begin{pmatrix} 1 & -2 & 3 \\ -3 & 2 & 3 \\ 2 & -1 & -1 \end{pmatrix}$$

とする. このとき行列式 $|A|$ の値は **18** である.

(2) 行列 B を

$$B = \begin{pmatrix} 2 & 1 & -2 & 3 \\ 0 & -3 & 2 & 3 \\ 0 & 2 & -1 & -1 \\ 1 & -5 & 1 & 0 \end{pmatrix}$$

とする. このとき行列式 $|B|$ の値は **19** である. よって B は逆行列をもつ.

逆行列 B^{-1} の (1,4) 成分は **20** である.

18 ∼ **20** の解答群

① 0

② 1 ③ 2 ④ 3 ⑤ 4 ⑥ 5 ⑦ 6 ⑧ 7 ⑨ 8

⑩ -1 ⑪ -2 ⑫ -3 ⑬ -4 ⑭ -5 ⑮ -6 ⑯ -7 ⑰ -8

計算用紙

問 2 座標空間内に 4 点 $O(0,0,0)$, $A(3,-1,1)$, $B(-1,2,2)$, $C(-4,-7,t)$ がある. ただし, t は実数とする. また, $\mathbf{a} = \overrightarrow{OA}$, $\mathbf{b} = \overrightarrow{OB}$, $\mathbf{c} = \overrightarrow{OC}$ とおく.

- (1) \mathbf{a} , \mathbf{b} , \mathbf{c} が 1 次従属（線形従属）になるのは $t = \boxed{21}$ のときである. このとき $\mathbf{c} = \boxed{22} \mathbf{a} + \boxed{23} \mathbf{b}$ と表すことができる.
- (2) \mathbf{c} が \mathbf{a} , \mathbf{b} の両方と直交するのは $t = \boxed{24}$ のときである.
- (3) 3 点 O , A , B を通る平面を α とする. 平面 α 上の任意の点を $P(x,y,z)$ で表すと, $\boxed{25}$ が成り立つ.

—— **21** ~ **24** の解答群 ——

- | | | | | | | |
|------|-------|-------|-------|------|------|-----|
| ① 0 | ② 1 | ③ 2 | ④ 3 | ⑤ 4 | ⑥ 5 | ⑦ 6 |
| ⑧ -1 | ⑨ -2 | ⑩ -3 | ⑪ -4 | ⑫ -5 | ⑬ -6 | |
| ⑭ -9 | ⑮ -11 | ⑯ -13 | ⑰ -15 | | | |

—— **25** の解答群 ——

- | | |
|------------------------|------------------------|
| ① $x + 2y + 5z = 0$ | ② $x + 2y - 5z = 0$ |
| ③ $-x + 2y + 2z = 0$ | ④ $-x + 2y - 7z = 0$ |
| ⑤ $3x - y + z = 0$ | ⑥ $3x - y - 4z = 0$ |
| ⑦ $-4x - 7y + z = 0$ | ⑧ $-4x - 7y - z = 0$ |
| ⑨ $-4x - 7y + 5z = 0$ | ⑩ $-4x - 7y - 5z = 0$ |
| ⑪ $-4x - 7y + 13z = 0$ | ⑫ $-4x - 7y - 13z = 0$ |

計算用紙

問3 2次元実ベクトル空間 \mathbb{R}^2 における線形変換について考える。

(1) 2次正方形行列 M が

$$M \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x \\ -y \end{pmatrix}$$

をすべてのベクトル $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^2$ について満たすとする。このとき $M = \boxed{26}$

である。また、行列 M が表す線形変換は、 xy 平面における x 軸に関する対称移動である。

(2) $-\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{\pi}{2}$ を満たす実数 θ に対して

$$R_\theta = \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$$

とおく。この行列が表す線形変換は、 xy 平面における原点を中心とする角 θ の回転である。ただし、反時計回りを正とする。このとき

$$R_\theta M R_{-\theta} = \boxed{27}$$

がすべての θ について成り立つ。また、行列 $\boxed{27}$ が表す線形変換は、原点を中心とする回転と x 軸に関する対称移動の合成であることに注意すると、 xy 平面における $\boxed{28}$ であることがわかる。

26 の解答群

- | | | | | | |
|---|--|---|--|---|--|
| ① | $\begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$ | ② | $\begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$ | ③ | $\begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$ |
| ④ | $\begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$ | ⑤ | $\begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ | ⑥ | $\begin{pmatrix} -1 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ |
| ⑦ | $\begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ | ⑧ | $\begin{pmatrix} -1 & -1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ | ⑨ | $\begin{pmatrix} 1 & 1 \\ -1 & -1 \end{pmatrix}$ |

27 の解答群

$$\textcircled{0} \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$$

$$\textcircled{1} \begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ -\sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$$

$$\textcircled{2} \begin{pmatrix} -\cos \theta & \sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$$

$$\textcircled{3} \begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ \sin \theta & -\cos \theta \end{pmatrix}$$

$$\textcircled{4} \begin{pmatrix} \cos 2\theta & -\sin 2\theta \\ \sin 2\theta & \cos 2\theta \end{pmatrix}$$

$$\textcircled{5} \begin{pmatrix} \cos 2\theta & \sin 2\theta \\ -\sin 2\theta & \cos 2\theta \end{pmatrix}$$

$$\textcircled{6} \begin{pmatrix} -\cos 2\theta & \sin 2\theta \\ \sin 2\theta & \cos 2\theta \end{pmatrix}$$

$$\textcircled{7} \begin{pmatrix} \cos 2\theta & \sin 2\theta \\ \sin 2\theta & -\cos 2\theta \end{pmatrix}$$

28 の解答群

① 原点を中心とする角 θ の回転

② 原点を中心とする角 $-\theta$ の回転

③ 原点を中心とする角 2θ の回転

④ 直線 $y = (\tan \theta)x$ に関する対称移動

⑤ 直線 $y = -(\tan \theta)x$ に関する対称移動

⑥ 直線 $y = (\tan 2\theta)x$ に関する対称移動

⑦ 直線 $y = -(\tan 2\theta)x$ に関する対称移動

問4 連立1次方程式

$$(*) \quad \begin{cases} x + 2y - 5z = -1 \\ y - 3z = -2 \\ 2x + 2y - 4z = a \end{cases}$$

を考える。ただし、 a は定数とする。この方程式の係数行列 A 、拡大係数行列 B は

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & -5 \\ 0 & 1 & -3 \\ 2 & 2 & -4 \end{pmatrix}, \quad B = \begin{pmatrix} 1 & 2 & -5 & -1 \\ 0 & 1 & -3 & -2 \\ 2 & 2 & -4 & a \end{pmatrix}$$

である。

(1) $\text{rank } A = \boxed{29}$ である。

(2) $a \neq \boxed{30}$ のとき、 $\text{rank } A < \text{rank } B$ である。よって、方程式 $(*)$ は $\boxed{31}$ 。

(3) $a = \boxed{30}$ のとき、 $\text{rank } A = \text{rank } B$ である。このとき方程式 $(*)$ の解は

$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3 \\ -2 \\ 0 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} \boxed{32} \\ 3 \\ 1 \end{pmatrix} \quad (t \text{ は任意定数})$$

と表すことができる。

29・30・32 の解答群

- | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|-----|
| ① 0 | ② 1 | ③ 2 | ④ 3 | ⑤ 4 | ⑥ 5 | ⑦ 6 | ⑧ 7 |
| ⑨ -1 | ⑩ -2 | Ⓐ -3 | Ⓑ -4 | Ⓒ -5 | Ⓓ -6 | Ⓔ -7 | |

31 の解答群

- | | | |
|-----------|---------------|---------------|
| ① 解をもたない | ② ちょうど2組の解をもつ | ③ ちょうど3組の解をもつ |
| ④ 無数の解をもつ | | |

計算用紙

問 5 行列 $A = \begin{pmatrix} 0 & a & -3 \\ -1 & 2 & -1 \\ -1 & 1 & 2 \end{pmatrix}$ の固有値が 3 (重複度 2) と -2 であるとする. ただし, a は定数とする.

(1) このとき $a = \boxed{33}$ である.

(2) 固有値 3 に対応する A の固有ベクトルとして $\mathbf{p} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ \boxed{34} \end{pmatrix}$ がとれる.
この \mathbf{p} に対して

$$(A^3 - 2A^2 - A)\mathbf{p} = \boxed{35} \mathbf{p}$$

が成り立つ.

—— $\boxed{33} \sim \boxed{35}$ の解答群 ——

- | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|-----|
| ① 0 | ② 1 | ③ 2 | ④ 3 | ⑤ 4 | ⑥ 5 | ⑦ 6 | ⑧ 7 |
| ⑨ -1 | ⑩ -2 | Ⓐ -3 | Ⓑ -4 | Ⓒ -5 | Ⓓ -6 | Ⓔ -7 | |

計算用紙

第3分野 常微分方程式

[問 1 ~ 問 5 : 解答番号 **36** ~ **53**]

(注意) 各問における y は x の関数であり, y', y'' は y の導関数 $\frac{dy}{dx}, \frac{d^2y}{dx^2}$ を表す. すべての微分方程式は関数が定義される範囲で考える. また, 特殊解は特解ともいう.

問 1 変数分離形の微分方程式

$$(*) \quad (1+2x)y' = 3+y$$

を $x > 0$ の範囲で考える. この一般解は任意定数 C を用いて

$$y = \boxed{36} + C \cdot \boxed{37}$$

と表される.

さらに, 方程式 $(*)$ の解 $y = y(x)$ が初期条件 $y\left(\frac{3}{2}\right) = 3$ を満たすとき

$$y = \boxed{36} + \boxed{38} \cdot \boxed{37}$$

である.

36 • **38** の解答群

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|-----|
| ① 0 | ② 1 | ③ 2 | ④ 3 | ⑤ 4 | ⑥ 5 |
| ⑦ -1 | ⑧ -2 | ⑨ -3 | ⑩ -4 | ⑪ -5 | |

37 の解答群

- | | | |
|----------------|----------------|-----------------|
| ① $1+x$ | ② $2+x$ | ③ $1+2x$ |
| ④ $\sqrt{1+x}$ | ⑤ $\sqrt{2+x}$ | ⑥ $\sqrt{1+2x}$ |
| ⑦ $1+\sqrt{x}$ | ⑧ $2+\sqrt{x}$ | ⑨ $1+\sqrt{2x}$ |

計算用紙

問 2 解答群にある微分方程式の中から、以下の文章にあてはまるものをそれぞれ1つ選べ。

(1) 関数 $y = \frac{1}{2}x^3 + x - \frac{5}{8}$ を解としてもつ微分方程式は **39** である。

(2) 関数 $y = 7 \sin \sqrt{3}x$ を解としてもつ微分方程式は **40** である。

(3) 関数 $y = 2e^{3x}$ を解としてもつが、 $y = -e^{-x}$ を解としてもたない微分方程式は **41** である。

39 ~ **41** の解答群

① $y'' + 3x = 0$ ② $y'' - 3x = 0$

③ $y'' + 3y = 0$ ④ $y'' - 3y = 0$

⑤ $y'' + 3y' = 0$ ⑥ $y'' - 3y' = 0$

⑦ $y'' - 2y' + 3y = 0$ ⑧ $y'' - 2y' - 3y = 0$

計算用紙

問3 微分方程式

$$(*) \quad xy' + y = 3xy^2$$

を $x > 0$ の範囲で考える。

(1) まず $y(x) = \frac{1}{u(x)}$ とおくと, 方程式 (*) は u に関する 1 階線形微分方程式

$$(**) \quad u' + \boxed{42} = -3$$

となる. (**) に対応する同次方程式 $u' + \boxed{42} = 0$ の一般解は, 任意定数 C_1 を用いて

$$(***) \quad u = \boxed{43}$$

と表される。

42 の解答群

- | | | | | | | | | | | | |
|---|----------------|---|-----------------|---|------------------|---|-------------------|---|-----------------|---|-------------------|
| ① | x | ② | $-x$ | ③ | xu | ④ | $-xu$ | ⑤ | $\frac{1}{x}$ | ⑥ | $-\frac{1}{x}$ |
| ⑥ | $\frac{1}{x}u$ | ⑦ | $-\frac{1}{x}u$ | ⑧ | $\frac{1}{x^2}u$ | ⑨ | $-\frac{1}{x^2}u$ | ⑩ | $\frac{1}{x^2}$ | ⑪ | $-\frac{1}{x^2}u$ |

43 の解答群

- | | | | | | | | |
|---|---------------|---|------------|---|-------------------|---|------------------|
| ① | $x + C_1$ | ② | C_1x | ③ | $x^2 + C_1$ | ④ | $\sqrt{x} + C_1$ |
| ④ | $C_1\sqrt{x}$ | ⑤ | $C_1x + 3$ | ⑥ | $C_1\sqrt{x} + 3$ | ⑦ | C_1x^2 |

(2) (**)において, C_1 を x の関数 $v(x)$ と置き換えて, (**) に代入すると

$$v' = \boxed{44}$$

となる。これを解けば

$$v = \boxed{45} + C_2 \quad (C_2 \text{ は任意定数})$$

である。したがって, (**) の一般解は

$$u = \boxed{46}$$

となり, (*) の一般解は $y = \frac{1}{\boxed{46}}$ である。

44 の解答群

① $-\frac{x}{3}$

② $\frac{x}{3}$

③ $-\frac{3}{x}$

④ $\frac{3}{x}$

⑤ $-3x$

⑥ $3x$

⑦ $-x - 3$

⑧ $x - 3$

45 の解答群

① $-\frac{1}{3} \log x$

② $\frac{1}{3} \log x$

③ $-\log x$

④ $\log x$

⑤ $-3 \log x$

⑥ $3 \log x$

⑦ $-\log 3x$

⑧ $\log 3x$

46 の解答群

① $x\sqrt{x+C_2}$

② $x\left(\sqrt{2\log x} + C_2\right)$

③ $x(\log x + C_2)$

④ $x\sqrt{\log x + C_2}$

⑤ $x(-x + C_2)$

⑥ $x\sqrt{-\log x + C_2}$

⑦ $x(-3\log x + C_2)$

⑧ $x(3\log x + C_2)$

⑨ $\log x + C_2$

問 4 微分方程式

$$(*) \quad y'' + ay' + 4y = e^{bx}$$

について考える. ここで a, b は定数で, $b \neq 0$ とする.

(1) $a = \boxed{47}$ のとき, $(*)$ に対応する同次方程式

$$y'' + ay' + 4y = 0$$

の一般解 y_h は任意定数 C_1, C_2 を用いて

$$y_h = (C_1 + C_2 x) e^{2x}$$

と表される.

(2) $a = \boxed{47}$ のとき, $(*)$ が $y_p = K e^{bx}$ (K は定数) の形の特殊解をもつのは

$$b \neq \boxed{48}$$

の場合である. このとき, $K = \boxed{49}$ となる. したがって, $(*)$ の一般解は

$$y = y_h + y_p = (C_1 + C_2 x) e^{2x} + \boxed{49} e^{bx}$$

である.

—— $\boxed{47} \cdot \boxed{48}$ の解答群 ——

- | | | | | | |
|------|------|------|------|-------|-------|
| ① 0 | ② 1 | ③ 2 | ④ 4 | ⑤ 8 | ⑥ 16 |
| ⑦ -1 | ⑧ -2 | ⑨ -4 | ⑩ -8 | ⑪ -16 | ⑫ -32 |

—— $\boxed{49}$ の解答群 ——

- | | | | | |
|-----------------|------------------|------------------|-----------------------|-----------------------|
| ① b | ② $2b$ | ③ $4b$ | ④ $(b-2)^2$ | ⑤ $(b-4)^2$ |
| ⑥ $\frac{1}{b}$ | ⑦ $\frac{1}{2b}$ | ⑧ $\frac{1}{4b}$ | ⑨ $\frac{1}{(b-2)^2}$ | ⑩ $\frac{1}{(b-4)^2}$ |

計算用紙

問 5 関数 $y = y(x)$ $\left(-\frac{\pi}{4} < x < \frac{\pi}{4}\right)$ は微分方程式

$$(*) \quad y'' = 1 + 4(y')^2$$

の解で初期条件 $y(0) = y'(0) = 0$ を満たすものとする.

(1) $z = y'$ とおくと, $(*)$ は $z(x)$ に関する変数分離形微分方程式

$$z' = 1 + 4z^2$$

となる. これを解けば, ある定数 C_1 を用いて

$$(**) \quad \boxed{50} = 2x + C_1$$

が得られる.

50 の解答群

- | | | |
|------------------------|-------------------------|--------------------|
| ① $z + \frac{4}{3}z^3$ | ② $2z + \frac{8}{3}z^3$ | ③ $\log(1 + 4z^2)$ |
| ④ $\frac{1}{\tan 2z}$ | ⑤ $\tan^{-1} 2z$ | ⑥ $2 \tan^{-1} 2z$ |
| ⑦ $\frac{1}{\sin 2z}$ | ⑧ $\sin^{-1} 2z$ | ⑨ $2 \sin^{-1} 2z$ |
| ⑩ $\frac{1}{\cos 2z}$ | ⑪ $\cos^{-1} 2z$ | ⑫ $2 \cos^{-1} 2z$ |

(2) $z(0) = y'(0) = 0$ より, $(**)$ において $C_1 = \boxed{51}$ となる. このとき

$$y' = z = \boxed{52}$$

であるから, ある定数 C_2 を用いて

$$y = \int \boxed{52} dx = \boxed{53} + C_2$$

と表される. さらに, 条件 $y(0) = 0$ より $C_2 = 0$ となり

$$y = \boxed{53}$$

である.

51 の解答群

- ① 0 ② 1 ③ -1 ④ 2 ⑤ $-\frac{\pi}{2}$ ⑥ $\frac{\pi}{2}$ ⑦ π ⑧ $-\pi$

52 • 53 の解答群

- ① $\sin 2x$ ② $\frac{1}{2} \sin 2x$ ③ $\cos 2x$ ④ $\tan 2x$ ⑤ $\frac{1}{2} \tan 2x$
⑥ $\frac{1}{\cos 2x}$ ⑦ $-\frac{1}{\cos 2x}$ ⑧ $\frac{1}{2} \log(\cos 2x)$
⑨ $-\frac{1}{2} \log(\cos 2x)$ ⑩ $\frac{1}{4} \log(\cos 2x)$ ⑪ $-\frac{1}{4} \log(\cos 2x)$
⑫ $\log(\cos 2x)$ ⑬ $-\log(\cos 2x)$

第4分野 確率・統計

[問1～問4：解答番号 **54** ∼ **69**]

(注意) 事象 A に対し, $P(A)$ は A の起こる確率を表す. また, 確率変数 X に対し, $E(X)$, $V(X)$ はそれぞれ期待値 (平均, 平均値), 分散を表す.

問1 (1) 確率変数 X, Y が独立で, 確率分布がともに

X の値 (Y の値)	-4	-1	0	2	3
確率	$\frac{1}{12}$	$\frac{1}{6}$	a	$\frac{1}{4}$	$\frac{1}{3}$

(a は定数)

で与えられているとき

$$E(X) = E(Y) = \boxed{54}, \quad V(X) = V(Y) = \boxed{55}$$

である. また

$$V\left(\frac{X+2Y}{3}\right) = \boxed{56}$$

である.

54 ∼ **56** の解答群

① 0 ② 1 ③ 2 ④ 3 ⑤ 4 ⑥ 5

⑦ $\frac{1}{2}$ ⑧ $\frac{3}{2}$ ⑨ $\frac{5}{2}$ ⑩ $\frac{7}{2}$ ⑪ $\frac{9}{2}$ ⑫ $\frac{11}{2}$

⑬ $\frac{1}{3}$ ⑭ $\frac{5}{3}$ ⑮ $\frac{1}{4}$ ⑯ $\frac{3}{4}$

(2) 確率変数 X がパラメータ λ をもつポアソン分布に従っている. すなわち

$$P(X = n) = e^{-\lambda} \frac{\lambda^n}{n!} \quad (n = 0, 1, 2, \dots)$$

とする. また, $E(X) = 3$ であるとする. このとき, $\lambda = \boxed{57}$ であり

$$P(X \geq 2) = \boxed{58}$$

である.

—— **57** • **58** の解答群 ——

- | | | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|------------------------|
| ① 0 | ② 1 | ③ 2 | ④ 3 | ⑤ 9 |
| ⑥ $\sqrt{3}$ | ⑦ $\frac{1}{3}$ | ⑧ $\frac{2}{3}$ | ⑨ $\frac{1}{9}$ | ⑩ $\frac{1}{\sqrt{3}}$ |
| ⑪ e | ⑫ e^3 | ⑬ $\log 3$ | | |
| ⑭ $1 - 3e^{-3}$ | ⑮ $1 + 3e^{-3}$ | ⑯ $1 - 4e^{-3}$ | ⑰ $1 + 4e^{-3}$ | |

問 2 ある工場では3つの機械a, b, cを用いてそれぞれ同じ製品を作っている。それぞれの機械から作られる製品の個数の割合は4:3:3である。また、不良品の出る確率はaが3%, bが4%, cが2%である。製品の中から無作為に取り出した1個が機械a, b, cを用いて作られたものであるという事象をそれぞれA, B, Cで表し、製品が不良品であるという事象をFとする。このとき

$$P(A) = \frac{4}{10}, \quad P(B) = \frac{3}{10}, \quad P(C) = \frac{3}{10},$$

$$P(F|A) = \frac{3}{100}, \quad P(F|B) = \frac{4}{100}, \quad P(F|C) = \frac{2}{100}$$

である。ここで、2つの事象D, Eに対し、 $P(D|E)$ はEが起こったときのDが起こる条件付き確率を表す。取り出した製品が機械aを用いて作られ、かつ不良品である確率は

$$P(A \cap F) = \boxed{59}$$

である。また、取り出した製品が不良品である確率は

$$P(F) = \boxed{60}$$

である。さらに、取り出した製品が不良品であったとき、それが機械aを用いて作られたものである確率は

$$P(A|F) = \boxed{61}$$

である。

59 ~ **61** の解答群

- | | | | | |
|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| ① $\frac{2}{5}$ | ② $\frac{3}{5}$ | ③ $\frac{4}{5}$ | ④ $\frac{2}{6}$ | ⑤ $\frac{3}{6}$ |
| ⑥ $\frac{2}{100}$ | ⑦ $\frac{3}{100}$ | ⑧ $\frac{4}{100}$ | ⑨ $\frac{7}{100}$ | ⑩ $\frac{9}{100}$ |
| ⑪ $\frac{10}{1000}$ | ⑫ $\frac{12}{1000}$ | ⑬ $\frac{14}{1000}$ | ⑭ $\frac{16}{1000}$ | ⑮ $\frac{18}{1000}$ |

計算用紙

問3 確率変数 X の確率密度関数 $f(x)$ が、ある定数 c に対して

$$f(x) = \begin{cases} \frac{c}{(x+3)^2} & (x \geq 0) \\ 0 & (x < 0) \end{cases}$$

で与えられている。

(1) $c = \boxed{62}$ である。

62 の解答群

- ① 0 ② 1 ③ 2 ④ 3 ⑤ $\frac{1}{2}$ ⑥ $\frac{1}{3}$ ⑦ $\frac{1}{4}$

(2) X の分布関数を $F(x) = P(X \leq x)$ とすると

$$F(x) = \begin{cases} \boxed{63} & (x \geq 0) \\ \boxed{64} & (x < 0) \end{cases}$$

である。また、 $P(|X| \leq 1) = \boxed{65}$ である。

63・64 の解答群

- ① 0 ② 1 ③ $\frac{1}{x+3}$ ④ $-\frac{1}{x+3}$
⑤ $\frac{3}{x+3}$ ⑥ $-\frac{3}{x+3}$ ⑦ $1 - \frac{1}{x+3}$ ⑧ $1 + \frac{1}{x+3}$
⑨ $1 - \frac{3}{x+3}$ ⑩ $1 + \frac{3}{x+3}$

65 の解答群

- ① 0 ② 1 ③ $\frac{1}{2}$ ④ $\frac{1}{3}$ ⑤ $\frac{2}{3}$
⑥ $\frac{1}{4}$ ⑦ $\frac{3}{4}$ ⑧ $\frac{1}{5}$ ⑨ $\frac{2}{5}$ ⑩ $\frac{3}{5}$

計算用紙

問 4 ある飲料メーカーでは、500 ml入りのペットボトル飲料の製品 Q を製造している。この製品を製造する機械を変更したので、変更前と同様の内容量で製品が作られているか調べることにした。過去の測定データから、製品 Q の 1 本あたりの内容量は正規分布に従い、内容量の母標準偏差は 0.5 ml と仮定してよいことがわかっている。変更後の製造機械で作られた製品 Q を無作為に 100 本抽出し、その内容量を測定したところ、平均は 499.74 ml であった。

この測定に基づいて、母平均 μ ml に対する

帰無仮説 $H_0 : \mu = 500$

対立仮説 $H_1 : \mu \neq 500$

の両側検定を有意水準 1% で行うこととした。抽出した 100 本の内容量をそれぞれ確率変数 X_1, X_2, \dots, X_{100} とすると、これらはすべて独立で正規分布 $N(\mu, 0.5^2)$ に従う。このとき、標本平均

$$\bar{X} = \frac{X_1 + X_2 + \dots + X_{100}}{100}$$

は正規分布 $N\left(\boxed{66}, \boxed{67}\right)$ に従う。帰無仮説 H_0 のもとでは

$$Z = \frac{\bar{X} - 500}{0.5/\sqrt{100}}$$

は標準正規分布 $N(0, 1)$ に従う確率変数である。正規分布表から

$$P(-2.576 \leq Z \leq 2.576) \doteq 0.99$$

がわかる。一方、標本平均 \bar{X} の実現値は $\bar{x} = 499.74$ (単位: ml) であるので、 Z の実現値は $z = \boxed{68}$ となる。よって、帰無仮説 H_0 は有意水準 1% で $\boxed{69}$ 。

66 の解答群

- ① $\frac{\mu}{100}$ ② μ ③ 10μ ④ 100μ ⑤ 0.5μ ⑥ $0.5^2\mu$

67 の解答群

- ① 100×0.5 ② 100×0.5^2 ③ $100^2 \times 0.5^2$ ④ $\frac{0.5}{100}$ ⑤ $\frac{0.5^2}{100}$ ⑥ $\frac{0.5}{100^2}$ ⑦ $\frac{0.5^2}{100^2}$

68 の解答群

- ① 0 ② 0.52 ③ 0.78 ④ 1.04
⑤ 2.6 ⑥ 5.2 ⑦ 7.8 ⑧ 10.4
⑨ -0.26 ⑩ -0.52 ⑪ -0.78 ⑫ -1.04
⑬ -2.6 ⑭ -5.2 ⑮ -7.8 ⑯ -10.4

69 の解答群

- ① 採択される ② 棄却される